学校における「不登校の未然防止」についての調査研究事業報告書

～共同研究地域及び共同研究校における実践より～

兵庫県立但馬やまびこの郷

目　次

1　はじめに　1

2　共同研究地域及び共同研究校における「不登校の未然防止」の取組

(1)　「居場所づくり」と「絆づくり」の取組　1

(2)　不登校数の「見える化」による実態把握　2

(3)　意識調査にもとづくＲ－ＰＤＣＡサイクル　2

3　共同研究校における実践事例

(1)　Ａ中学校の取組（平成 30 年度の取組より）－中学３年生に注目して－　5

(2)　Ｂ中学校の取組（令和元年度の取組より）　－授業のＵＤ化と学力向上の視点を取り入れて－　7

(3)　グループ・アプローチを取り入れた「居場所づくり」「絆づくり」の取組　9

4　まとめ　11

◆別添資料◆　～不登校の未然防止にかかわる取組についてのアンケート調査より～

1　はじめに

「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査（文部科学省）」によると、平成30年度における全国の公立小・中学校の不登校数は15万8,850人と過去最多になりました。兵庫県においても7,609人（小学校1,873人、中学校5,736人）と、ここ３年間で約1.5倍になっています。また、不登校の長期化が課題になる一方で、新たに不登校となった児童生徒が兵庫県内不登校数の半数を超え（兵庫県内不登校数7,609人の内52.2%が新規数）、喫緊の課題となっています。

このような状況下、兵庫県立但馬やまびこの郷では、不登校児童生徒の支援を中心に進めてきたこれまでの研究を基盤に、新たな不登校を出さない「不登校の未然防止」についての研究に、平成29年度より取り組んできました。国立教育政策研究所の「魅力ある学校づくり調査研究事業」を参考に、共同研究地域及び共同研究校の協力のもと研究を推進してきました。共同研究校は、共同研究地域内の中学校とし、学校が生徒にとって意味のある大切な場となるために、行事だけでなく日常の学校生活においても自分たちの取組が全ての生徒に届いているのかを点検し、その後の取組を定期的に見直しながら、不登校の未然防止に取り組んでいただきました。

本報告書では、兵庫県内４中学校（平成29年度は１校、平成30年度以降は４校）の共同研究校におけるこれまでの取組についてまとめていますので、主として中学校の生徒を対象としたものになっていますが、不登校の未然防止については小学校でも同様のことが重要だと思います。

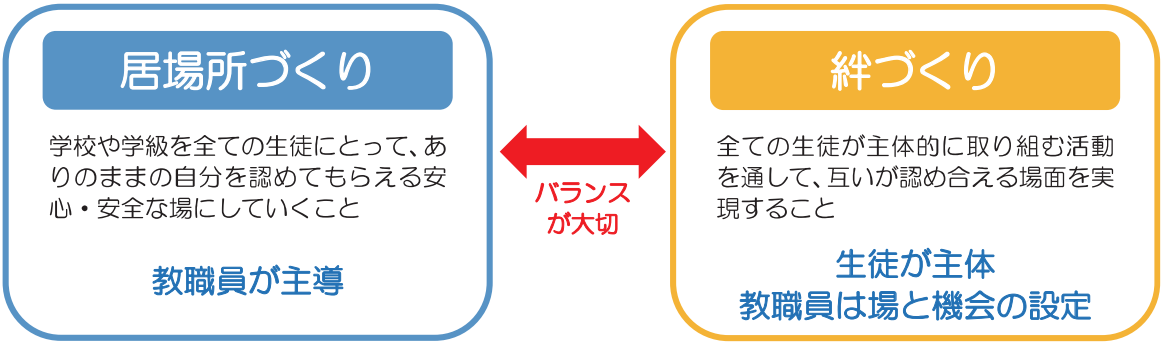
2　共同研究地域及び共同研究校における「不登校の未然防止」の取組

不登校を減らすための取組といえば、一般的には前年度に不登校であった生徒を学校に復帰させる取組を連想しがちです。しかし、不登校状態にある生徒を学校復帰させることは容易なことではなく、また、学校復帰が好ましい選択肢でない状況の生徒もいます。

そこで、不登校数を減らすための取組を推進するのであれば、まず新規数の抑制を図ることが現実的であると言えます。新規数を抑制するためには、全ての生徒が学校を魅力ある場と感じられるようにする必要があります。誰にとっても魅力ある学校であれば自ずと新規数は抑制され、それに伴い不登校数は減少すると考えられるからです。

(1)　「居場所づくり」と「絆づくり」の取組

全ての生徒が、「学校に行きたい」「学校が楽しい」と感じるために、「居場所づくり」と「絆づくり」を意識した学校・学級づくりを目指しました。



(2) 不登校数の「見える化」による実態把握（図１）

不登校の未然防止に取り組むにあたり、まず学校における不登校の実態を把握する必要があります。しかし従来のような年度末の不登校総数だけでは、実態の把握が不十分です。そこで、「不登校数を『継続数（前年度も不登校であった生徒数）』と『新規数（今年度新たに不登校になった生徒数）』に分けて把握する」「学期末ごとに規定日数以上の不登校数を把握する」「規定日数未満でも気になる生徒を把握する」の３つの視点から実態を把握し、グラフによる「見える化」を図りました。

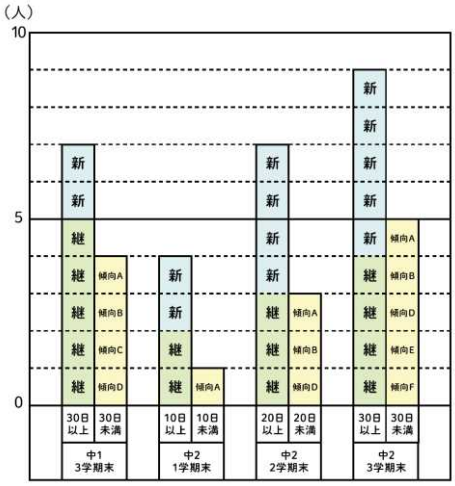


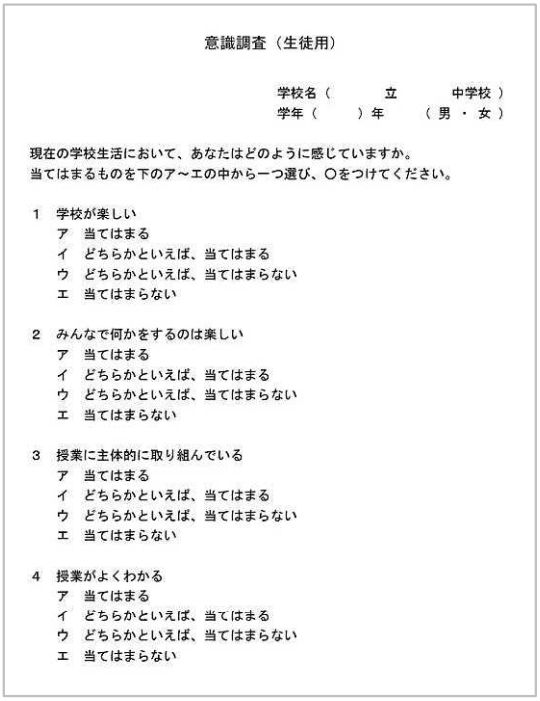
図１　グラフによる不登校・不登校傾向数の実態把握（見える化）

(3) 意識調査にもとづくＲ－ＰＤＣＡサイクル（図４）

年度中に取組の点検・見直しを実施することで、個々の教職員の思い込みや認識のずれが修正され、共通理解による実践が進みます。そこで、意識調査を長期休業前に行い、長期休業中に学年会議等でこれまでの取組を点検して見直し、次学期の行動計画を考えて実行するという「Ｒ－ＰＤＣＡサイクル」を年３回実施しました。

図２は、国立教育政策研修所の取組を参考に作成した意識調査の様式です。４つの質問は、教職員の取組を点検するための指標となります（主たる不登校の要因が、友人関係と学力の問題であるという指摘を踏まえて作られています）。この指標により、取組が本当に全ての生徒に浸透しているか否かを判断し、今後の対策や方向性を考える際のデータとして活用しました。

ただし、この調査結果の数値だけを見ていても、問題の原因がどこにあるのか、今後何をすべきなのかは分かりません。そうした原因と対策は、その期間の授業や行事等にかかわり生徒の様子を見てきた全ての教職員が協議する中で明らかになります。そこで、図３の点検・目標設定カードを活用した教職員のディスカッションにより、取組の点検と見直し、次学期の行動計画の作成を行いました。このディスカッションにより、課題が共有され共通の目標を持って取組ができるとともに、教職員が取組計画を練り上げ、取り組む過程を通して「協働性」を高めることもねらいとしました。



意識調査（生徒用）

学校名（　　立　　中学校）
学年（　　）年　（男・女）

現在の学校生活において、あなたはどのように感じていますか。
当てはまるものを下のア～エの中から一つ選び、○をつけてください。

1　学校が楽しい
　ア　当てはまる
　イ　どちらかといえば、当てはまる
　ウ　どちらかといえば、当てはまらない
　エ　当てはまらない

2　みんなで何かをするのは楽しい
　ア　当てはまる
　イ　どちらかといえば、当てはまる
　ウ　どちらかといえば、当てはまらない
　エ　当てはまらない

3　授業に主体的に取り組んでいる
　ア　当てはまる
　イ　どちらかといえば、当てはまる
　ウ　どちらかといえば、当てはまらない
　エ　当てはまらない

4　授業がよくわかる
　ア　当てはまる
　イ　どちらかといえば、当てはまる
　ウ　どちらかといえば、当てはまらない
　エ　当てはまらない

図２　意識調査

取組例
- グループアプローチ
- 授業の UD 化
- 協働学習
- 質問タイム　等

Research

実態把握（意識調査）

前年度の学年末に意識調査を行い、子どもたちの実態を把握します。

質問

1　学校が楽しい
2　みんなで何かをするのは楽しい
3　授業に主体的に取り組んでいる
4　授業がよくわかる

回答

ア　当てはまる
イ　どちらかといえば、当てはまる
ウ　どちらかといえば、当てはまらない
エ　当てはまらない

課　題　の　分　析

目標設定

意識調査の結果から、「当てはまる」の数値のみに注目して重点的に取り組む目標を設定します。

Plan

行動計画

目標の達成に向けて、具体的な行動計画を作成します。

○○中学校　　第　○学年　記入者

		意識調査項目	「あてはまる」と回答した生徒の割合 前3月	7月	12月	3月
点検	1	学校が楽しい				
	2	みんなで何かをするのは楽しい				
	3	授業に主体的に取り組んでいる				
	4	授業がよくわかる				

		こだわる項目に○（1項目）	理由（学年メモ）
課題	1	学校が楽しい	
	2	みんなで何かをするのは楽しい	
	3	授業に主体的に取り組んでいる	
	4	授業がよくわかる	

		こだわる項目に○（1項目）	取組目標（学年メモ）
目標	1	学校が楽しい	
	2	みんなで何かをするのは楽しい	
	3	授業に主体的に取り組んでいる	
	4	授業がよくわかる	

図３　点検・目標設定カード

図4　意識調査にもとづく

Do
実行

行動計画に基づいて、全ての教職員で取組を実行します。

Check
調査

同じ内容の意識調査を各学期末に行い、取組の浸透度を測ります。

P D C A

サイクル

（年間３回実施）

Action
点検・見直し

学期末の意識調査の結果から、どの取組が有効であったか、数値が上がらなかったのはなぜか等を検証します。

意識調査に基づく取組の流れ「R―PDCA サイクル」は、計画を立てる前にまず実態を把握（Research）し、それを踏まえて全ての教職員で計画（Plan）を立て、実行（Do）します。
そして、同じ内容の意識調査（Check）を学期末に行い、全ての教職員で点検して取組を見直し（Action）、次学期の取組に繋げます。

教職員のディスカッションにより期待できる効果

- 課題が共有され、共通の目標を持って取り組むことができます。
- 取組計画を練り上げ、取り組む過程を通して「協働性」を高めることができます。

R－PDCAサイクル